＊＊＊記　事＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

例会抄録

梅毒の薫薬療法について

中西淳朗

一九九八年に横浜市金沢区の松本龍二氏（元区医師会長）は、金沢区医師会発刊の『金沢の開業医史』の中で、大正前期に金沢八景の田中病院で薫薬療法が行なわれていたこと、金沢瀬戸の金竜禅院所蔵の「医方巻石秘録」という処方集に、薫薬療法を見出だされたことを発表された。これに刺激をうけ、一連の研究をしたので不十分であるが追加報告する。

松本氏の発表によると、田中病院では艾葉に薬品をつつみ葉巻状となし、両鼻にこれをつっこんで火をつけ、煙を吸わせると涎がダラダラと出てきたとの証言から、水銀剤の嗅ぎ療法（薫薬療法）と判断したという。また松本氏の見出だした処方は紫雲條というもので、大麻の茎髄の黒焼粉末と朱砂（硫化水銀）の粉末を紙筒に入れ、その一方を鼻孔につっこんで火をつける。他の薫薬処方においても炭末と水銀剤が骨格となっており大差はないことを調査で知った。（炭となる植物が異ったり、水銀の産地が異ったり甘汞であったりであった）

他方、タバコの歴史を調べてみると、アメリカ先住民が十六世紀前は、葉巻タバコを吸うときは鼻孔につっこんだ方式（Sunuffing）であった。薫薬療法においてはこれを真似た感がある。

京都の蘭方医・広川　獬は、その著『蘭療法』（享和四年・一八〇四）において、薫薬方の欄外にVerrooken（フルローケン）としたためている。この語はオランダ語でタバコで時間をつぶす、タバコで金銭をついやすことを意味する。これは一つの示唆となっている。

米大陸から帰欧したポルトガル人らは、すでにSunuffingをした経験を有しており、当時の万能薬水銀をこのような方法で吸入し、これが中国を通じて渡来したものと考えたい。

かくの如きSunuffingは鼻腔粘膜等に直接強い刺激を与えるので、次第にパイプ方式に変化し二百年後には、マドロスパイプ型で吸入する方法となった（演者架蔵の古写本「長崎吉雄先生秘伝」文政七、一八二四年筆写、に見られる）。

この様な薫薬療法が明治初期に横浜で実施されたかを、カー氏皮膚新論（明治八年）、ニュートン氏黴療新法（明治四年）、シモンズ氏黴毒小箒（明治五年）、東京帝大医科全書梅毒編（シュルツエ氏口述、明治十四年）の四書で探したが、水銀剤の薫薬（吸入）療法は見出せなかった。

一方、大正時代ではどうか。福岡医科大学雑誌特別号『黴毒号』をみると、旭　憲吉教授は〝今日ニ於テハ殆ンド跡ヲ

絶ツ〟とかいている。しかし、大日本衛生警察協会刊の『衛生警察全書』（大正十年）では〝今日でも之を使う人はいくらもいる〟とし、昭和十四年発刊の岩熊　哲著『医史学論考』においても〝俗間では想像以上に流行している〟と記されている。適応は頸から上の第三期梅毒。

この様な状況は、一九一四年から始まった第一次大戦によるドイツからの薬品輸入の途絶や、昭和初期の経済パニック等が尾をひいて、安価にして簡便な薫薬療法が全国各地に残存したものと考えられる。

（平成十一年九月例会）

佐藤方定の発見した『大同類聚方（延喜本・寮本）』の上表文について

後藤　志朗

『大同類聚方』は、桓武天皇の遺命によって、わが国に残る薬方をまとめたものである。しかし、寛政十一年に『日本後紀』の残巻が刊行され、その大同三年五月三日の記述と『大同類聚方』の編者の名・官職名が異なることから偽書の疑いが掛けられ、今日まで至っている。その源は、佐藤方定が天保二年に刊行した『奇魂』である。その中で佐藤は、天保二年までに目にした『大同類聚方』の流布本・印本に対して八つの疑問点をあげて『大同類聚方』を偽書と断定している。

富士川游が『日本医学史』（明治三十七年刊）をまとめる際に、佐藤の『奇魂』を重視し、その説を全面的に採用したことで、『大同類聚方』偽書説が不動のものになった。しかし、嘉永元年に、佐藤自身が真本と認める『大同類聚方（延喜本・寮本）』を発見している。佐藤は、それを『勅撰真本大同類聚方』と命名して、安政三年より刊行を始めている。この事を富士川やその後の人達は認識していない。それ故、佐藤の発見した『大同類聚方』の検討なしには、真偽の判定は出来ない。

筆者は、その検討作業の一環として『日本医史学雑誌』に「『勅撰真本大同類聚方』について」（四十三巻一号）及び「新発見「大同類聚方」に関する大同三年五月三日の詔文」（四十五巻二号）を発表した。

佐藤の発見した『大同類聚方』には、撰集を完うした時に平城天皇に進った上表文が存在する。そして、上表文のある『大同類聚方』は佐藤が発見したものだけである。

『日本後記』の大同三年五月三日条文の基になったと考えられる「桓武天皇の遺命・平城天皇の詔文」（国文学研究資料館所蔵のマイクロ資料）と、佐藤方定刊行の『大同類聚方』にある上表文とを、比較検討した。

『大同類聚方』の上表文は、古事記・令義解・延喜式の上表文と比較しても遜色のないものである。つまり、「臣真貞等聞」で始まり、「臣真貞等誠惶誠恐頓首頓首謹言」で終わり、末尾の大同三年五月三日の日付の後に、典薬寮の五名（大初位上